

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その14）

～「ミニバスケットボールの今昔 ②」～

2020年5月吉日

広島県バスケットボール協会U12部会

スーパーバイザー 大庭浩資

3 タイマー、30秒計

今もタイマーの役目はとても大切ですね。特に試合終了間際には、試合結果を大きく左右するので、タイマーも審判も神経を使います。

でも当時は、今よりもっと難しく、本当に大変でした。

まず計時ですが、すべて手元のストップウォッチで行いました。そのストップウォッチも今ほど性能のよいものではありません。知っている人は少ないと思いますが、デジタルタイマーではなく、秒針と分針が動くものでした。もちろん止めなければいけない時に止め忘れるとどんどん時間は進みます。またスタートしないといけない時に押し忘れると時間は進みません。これは今も同じですが、違うところは、ストップウォッチですから、今のタイマーのようにもとに戻すことはできませんし、先に進めるのも簡単ではありません。

審判も今でこそ残分表示を見ることはできますが、当時はストップウォッチを操作してる人しか本当の時間は分かりません。

では、どうやって時間をベンチや観客に知らせていたのでしょうか。

それは時間の進行に合わせて、数字の書かれた縦50cm、横30cmくらいの厚紙をめくりながら知らせていました。

試合開始は「6」の表示です。トスアップが行われ、タイムインになると、すぐに「6」の数字を「5」に変えます。これは、「残り5分は確実にあります」の意味です。次に1分経過したら「5」を「4」に変えます。つまり「あと4分59秒～4分は確実にあります」という意味です。残り1分を切ると厚紙は赤い字の「1/2」に変わります。これは「残り30秒（1/2分）は確実にあります」の意味です。さらに残り30秒を切ると「1/4」に変わります。そして残り15秒になると「0」に変わります。ですから本当の残り時間は、ストップウォッチを操作している人しか分からないのです。審判の中には気の利く人もいて、正確な残り時間を調べた後、「残り12秒」と言い、試合を見ている人に知らせました。こんな様子ですから、時には厚紙をめくるのを忘れていて、数字が「4」からいきなり「1」になることもありました。しかしそれくらいはまだ愛嬌で、時には、「1」や「1/2」のまま試合が終了したりするということもありました。その時は、勝ったチームはよいものの、負けたチームからはものすごい抗議があったことは想像していただけたと思います。

その後、デジタルの残分表示計が発売された時は、みんな大喜びでした。当時の販売価格は、今より相当高かったのですが、それでも連盟としてお金を節約しながら、試合会場にだけは揃える努力をしたものです。

それを思うと、今はとても分かりやすい残分表示計があり便利になったものです。

また、30秒ルールが導入された時も大変でした。

当時はもちろん30秒計はなく、こちらストップウォッチを利用しました。TO席で、担当の者がタイマーとは別のストップウォッチで計測。残り15秒から6秒で黄色い旗を振り、残り5秒で赤い旗を振って知らせていました。

今は試合の流れを見ながら、操作盤のボタンを押しますが、当時は試合を見たり時計を見たり旗を振ったりでしたから大変さが想像できると思います。しかも旗振りはTO席で行うので、コーチにも審判にもあまりよく見えませんでした。今のゾーンディフェンス禁止の合図をコミッショナーが送っている様子とよく似ています。

ただ30秒になることはめったになかったように記憶していますが、その理由は「8 30秒ルール」のところでお話しします。

4 得点表示

今は、残分表示計にセットについておりとても便利ですが、当時は体育科の授業で使用する得点板を使っていました。

今でもそうですが、すべて子どもが数字をめくるのですから間違えることもあります。また得点板はTO席にはなく、TO席の反対側、もしくはコート両サイドにありました。つまりスコアを記録する人と得点板をめくる人は離れていました。今でこそ、スコアチェックがしっかりされているので大丈夫ですが、当時は間違っただけで試合が進んだり終了したりすることもありました。

試合後、保護者がビデオを持って抗議に来られ、それを役員で時間をかけて見ながら確認すると、確かに負けたチームの方が得点を多く入れていたということもありました。もちろん、試合結果は変わりませんでした。負けたチームは悔やんでも悔やみきれなかったことと思います。

5 チームファウルと個人ファウル表示

チームファウルの表示は、方法としては今の積み木方式と変わっていません。ただ使用するものが今と大違いでした。さて当時は何を使用していたのでしょうか？

実は、高20cm位のプラスチック製の植木鉢に、1から7の数字（当時は7ファウル）を書いて、それを下向きに順々に重ねる方法をとっていました。1～6の数字は黒色、最後の7の数字は赤色でした。今だと本当に笑える話ですが、当時の役員がそれなりに考えた方法なのですね。

そのうち、黒色の積み木の表示板が販売されるようになり、それを使用するようになりました。

個人ファウルの表示は今と同じで、数字が書かれた板を使用して表示していました。